

つくば市を「キャンパス」に

35

～筑波学院大生の
実践活動報告～

経営情報学科3年

小笠原 颯汰

私は昨年、「茨城県立中央青年の家」が主催する宿泊体験学習「ときどき体験！〜縄文時代へタイムワープ〜」に参加した。期間中は毎日グループのリーダーとして、子供たちが行う古代食作りや遺跡発掘体験などの活動を見守ったり、指示をしたりした。

この活動を通して私が感じたのは、子供と接することの難しさと大変さである。子供というのは、例えば「並んで」と言うと並び、「静かに」と言うと静かにするなど、大人の言いつけ通りに行動するものだと考えていた。しかし、実際に子供に指示してみると全く逆のことが起きてしまい、正直、混乱してしまっただ。本当に一筋縄では



宿泊体験学習「ときどき体験！〜縄文時代へタイムワープ〜」に参加した

一筋縄ではいかない子供達に学ぶ

いかないのだと痛感した。また、一人でいる時と集団でいる時とで変わってしまう子供がいるのも目の当たりにした。一人にいるときは素直なのだが、集団になると周りに飲み込まれ、言うことを聞かなくなってしまうのである。もっとも、これは子供に限らず大人にも少なからずあることかもしれない。やはり人間にとっては、その置かれた環境が大事なのだ、と思った。

そして最後に実感したのは、宿泊学習や修学旅行などを引率する小学校の先生たちの大変さ、特に夜間の見回りの大変さである。小学生たちは夜、テンションが上がっているためか、なかなか寝ずに、消灯時間を過ぎても騒ぎに騒いでいた。

今回の活動で私は初めて夜間の見回りをしたが、自分が寝たい時間に寝られなくて、とても辛かった。これを小学校の先生たちが当たり前のようにやっているのは、非常に大変なことであると感した。

今後は、子供との接し方についてもっと深く知りたいと考えている。これからもいろいろな機会において、子供と関わる機会があるだろう。その際は、何をどう言えば子供たちが言うことを聞いてくれるのか、どう工夫したらこちらが指示した行動をとってくれるのか、ということをよく考えながら、子供たち一人一人に向き合っていきたい。

*学生が昨年8月から9月にかけて、「茨城県立中央青年の家」（土浦市）で活動を行いました。